

死者再生の願

北京や上海の骨董店だのガラクタ市だのを冷やかし歩いていると、しばしばセミをかたどった玉石を見かける。手のなかでもてあそんでいると、店の主人はもつともらしい顔つきで「含蟬だよ」と教えてくれる。

含蟬というのは、古代、死者の口に入れた含玉の一種で、とくにセミの形をしたものをいう（口絵参照）。そもそも玉には、魔除けや死体の腐敗防止、九竅（目・耳・鼻・口などの身体にあな）から魂が抜けだすのを防ぐなどの効力があると信じられ、古くから埋葬に用いられてきた。含玉をわざわざセミの形に刻んだ理由はいくつか推測されているが、ひとつは、そこに死者再生の願いをこめていたと考えられている。セミの幼虫が何年もひそんでいた真つ暗な地中から這いだし、木にのぼってゆくさまは、たしかに墳墓からのよみがえりを連想させる。

玉の含蟬は漢代になって大流行した。漢代というのは神仙思想が広まった時代でもある。当時の含蟬には、たんに再生への願いだけでなく、さらに屍解仙しかせけんになれるようにとの願望が託されていた可能性もある。

屍解仙というのは、死んだのちに魂だけが肉体を抜けだし仙人となるもので、生きながら昇天した「天仙」、地上で不老不死を得て名山に遊ぶ「地仙」の下に位する仙人だ。屍解仙は肉体を置き去りにする場合もあれば、屍体が消失し、かわりに着物や履、刀剣などをのこしていく場合もあ

る。仙人の伝記を集めた『列仙伝』や『神仙伝』にはさまざまな屍解仙が登場する。そのなかから一例をひろってみよう。

谷春は櫟陽こくしゆん うれきやう（いまの陝西省西安市閩良区えんりやう）の人で、前漢の成帝のときに郎官（宮門の守衛、天子の護衛などにあたる官職）となった。病で亡くなったため、家人は葬儀をいとなみ喪に服したものの、亡骸が冷たくならないので、棺に釘を打つ気になれずにいた。

そうこうして三年ほどたったある日のこと。彼が衣冠をなおして城門のうえに座していたものだから、街の人びとは腰を抜かした。知らせを聞いて家族が迎えにいったところ、いつしよに帰りはたがらない。自宅の棺の蓋を開けてみると、谷春の遺骸は消え、着物だけがのこされていた。

谷春は城門のうえで三日すごしたのち長安へ向かい、今度は長安城北側の横門のうえに腰をおろした。ふたたび家人がかけつけたが、今度は長安もはなれて太白山（陝西省南西にそびえる秦嶺山脈の主峰。道教の名山としても有名）へ行ってしまった。（前漢・劉向『列仙伝』）

谷春の場合は肉体をこの世に置き去りにして仙人となったが、納棺してしばらくたつて棺を開けてみたところ、遺骸も消え、最終的には着物しかのこっていなかったというパターンである。木の

枝にしんとしてぶらさがっているセミの抜け殻を見て、漢代の人びとは屍解仙が蛻むいていった着物を連想したこともあったのではないだろうか。また、羽化したてのセミは透きとおるように青白く、この世のものならぬ靈氣をただよわせている。仙人になることを羽化かとうせん登仙とうせんともいう。セミの羽化は、昇仙の神秘的なイメージともかさなったことだろう。

儒教を官学として国を治め、前漢の全盛時代を築いた第七代皇帝・武帝（劉徹。前一五六〜前八七年）もまた、神仙世界に傾倒していた。

『史記』孝武本紀や封禪書には、「即位すると、とりわけて鬼神きしんをうやうやしく祀った」武帝が、おびただしい数の方士たちを重用し、蓬萊に仙薬や仙人を求めさせ、封禪（天子が泰山の山頂で天を、ふもとで地を祀る儀式）をおこなったこと、また方士たちが武帝のまえでみせた神仙術のあれこれが記されている。

最晩年に方士たちの虚妄から目覚め、後元二（紀元前八七）年に没した武帝は、おびただしい数の玉片を金糸でつづりあわせたよろい「金縷玉匣きんるぎょくごう」に身を包み、茂陵に埋葬された。かつて不老不死を希求していた皇帝の口に、はたして含蟬は差し入れられたのだろうか。

次項以下にのべるように、中国人はセミにたいして日本人とはかなり異なるイメージをもっているが、「再生」や「登仙」はもともと魅惑的なイメージのひとつだろう。いま、中国の市中にでまわっているような含蟬は十中八九、模造品だろうけれど、ほこりっぽい骨董店の店先で、小さくて

平たくて滑らかな玉石のセミを目にするたび、つい、舌先がひんやりするような、陶然とした心もちになる。

セミがとまると出世する

南朝の梁に、武帝（蕭衍、しやうえん 四六四～五四九年）に寵遇されたのをよいことに専権をむさぼり、やがて国を衰退にみちびいた朱異（しゆい 四八三～五四九年）という奸臣がいる。少年時代は遊びほうけて賭博にのめりこんだりしていたが、もともと頭がよかつたのだらう。あるとき一念発起して勉強にいそしみ、たちまちにして五経をおさめ、あらかたの文学書や歴史書も読破してしまった。諸芸に通じ、書算や囲碁にもすぐれた腕前をみせた。

そんな彼が、おりから異能の士を求めていた武帝に召しだされ、拝謁したのは二十一歳のときのこと。「朱異はまことに俊異である」と、評判にたがわぬ才気煥発さが気に入られ、以後、とんとん拍子に出世した。朱異が中央官庁の中級役人に抜擢されたのはちょうど秋であつたが、拜命の日、どこからか一匹のセミが飛んできて、彼の冠にとまった。これを見た人びとは口ぐちに「蟬せみの兆ひらしだ」とささやいた。

蟬珥せみみというのは冠飾りの一種である。武官は「武冠」と呼ばれる冠を着用していたが、禁中への出入りが許されるほど高位のものは、セミをデザインした黄金製の豪華なバツジ「蟬せみ文もん金瑠きんろう」（口